日本語の条件表現

周　馥　卿

1．はじめに

日本語では、一般に条件表現の問題について論じられる時、四つの語――ト・タラ・バ・ナラが扱われる。条件表現の形は次のとおりである。

Cl_1ト　（動詞・形容詞の終止形＋と）Cl_2

Cl_1タラ（動詞・形容詞の過去形＋ら）Cl_2

Cl_1バ　（動詞・形容詞の仮定形＋ば）Cl_2

Cl_1ナラ（動詞・形容詞の終止形、名詞＋なら）Cl_2

実は、この四つの語によるいわゆる条件表現とは非常に幅広く、しかも、あいまいな問題である。既定条件・仮定条件・確定条件もあれば、因果関係を表わす条件・前後関係を表わす条件もある。また、完了対未了・実際的対論理的・一般的対個別的など、さまざまな角度から解釈されてきた。しかし、一つの枠組の解釈に限られ、その全体像を明らかにしようとする試みはあまり行われていないようである。本稿の目的は、言語主体の陳述態度を表わす枠組において、条件表現とは何かを見直すことと、以上の問題を解明することによって、四つの語の使い分けと意味の微妙な違いを解明することである。なお、私は次のような前提に立って話を進める。

1．文（Sentence）と節（Clause〔Cl〕）とが上下関係にあり、上位の文は下位の節が一つ以上集って構成される。

2．さらに、文と節を区別することによって、(i)文の意味、(ii)複数の節が結合した場合の意味、(iii)個々の節の内部の意味を分けて、考えることができる。

従来の多くの研究では、この二つの前提を見逃したため、条件表現に対する解釈がレベルの混同になったり、矛盾になったりして、円満な解答ができなかったようである。

2．陳述態度の枠組

本稿で提案する陳述態度の枠組は次の二つの要素を考慮に入れた陳述態度の枠組である。

1．文末の叙述表現（注1）

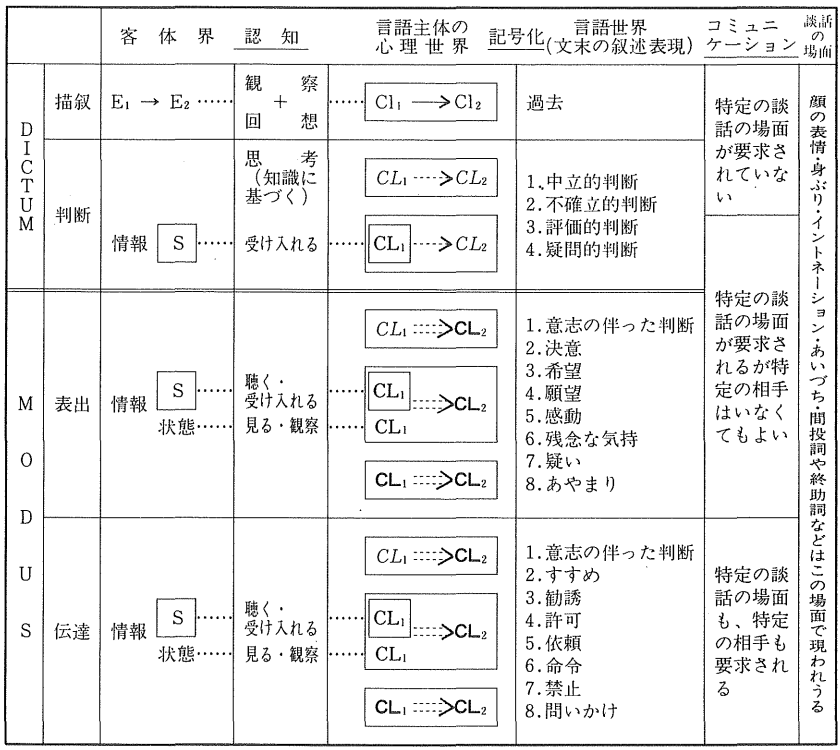
2．言語主体から見る事柄の性質――客体界の事柄であるか、言語主体の思考や意志であるか、特定の談話の場面（情報・相手などを含む）と関係ある事柄であるか。

そして、以上述べた二つの基準に基づき、この枠組を次にあげる四つの段階に分けられるが、林四郎の四段階の術語（注２）を借りてここで使うことにする。

Dictum	描叙段階	Depictive Stage
	判断段階	Assertive Stage
Modus	表出段階	Volitional Stage
	伝達段階	Directive Stage　（注３）

図式的に示せば、次のようである。

図１　言語主体の陳述態度の枠組



―――→	言語主体のコントロールできない二つの出来事の間の時間的関係	CL_1 CL_2	言語主体の想定された事柄
- - - - - - →	言語主体の思考・論理によって結びつけた関係	CL_1	情報と関係ある事柄
⇢⇢⇢	言語主体の思考・論理＋意志によって結びつけた関係	CL_1 CL_2	言語主体の意志・感情と直接関係ある事柄
E_1 E_2	客体界における出来事	S	相手による発話
Cl_1 Cl_2	観察された客体界の事柄		

枠組を dictum 的側面と modus 的側面との二つに大別したが、その区別はdictum 的側面においては、相手や言語主体の直接経験が現われていないが、modus 的側面においては相手や言語主体のその場の経験が現われていることに基づいている。つまり、文の内容は特定の談話の場面と直接な関係があるということである。

実は、dictum 的世界と modus 的世界との間をどのような基準によってわけたらいいかに関する研究は、多くの学者によってなされてきた（注４）が、それらの分析の中心は文末の述部における助動詞、終助詞などの要素の現われ方である。しかし、これだけでは、文を分類することができない。なぜなら、一つの文末の叙述要素（形）が文脈によって、違う意味を持ち、別々の類の文にしなければならない場合がある。次の例を見てみよう。

動詞の終止形

① 赤ん坊の時から絶えず、いい音楽を聞かせておくと、自然にフィーリングがよくなり、ひきずられて知性も発達する。

② 太郎がくるなら、私は帰る。

③ こうなったら、気狂いの振りで通してやる。

以上の三つの文の文末の形式は全部動詞の終止形であるが、動詞の意味や文全体を考えないと、言語主体のどういう態度を示しているかはわからない。①の場合、言語主体の事柄の因果関係に対する知的な認知が見られ、判断段階に入れるべきだと思う。②③の場合は、言語主体の事柄に対する心の表現――意志・決意が見られ、表出段階に入れるべきである。

評価的判断：よい／いい、よかった（のに）

④ いつも登録証を持ち歩くことを励行すればよい。

⑤ もっと、都の原案に近いものにできたらよかったのに。

⑥ どうせ死ぬなら、早く死ぬ方がいい。

⑦ 起こしてくれたらよかったのに。

④⑤に現われている「よい」と「よかったのに」は、言語主体が自分と直接関係ない事柄に対する評価が見られ、判断段階に入れるべきだが、⑥⑦の場合は、言語主体の強い意志や相手に対する働きかけ（非難する）が現われている。⑥は表出段階に入れるべきであり、⑦は伝達段階に入れるべきだと思う。

３．陳述態度の枠組における条件表現

３．１．描叙段階

言語主体が観察者の立場に立って、ある時点において、ある特定の場所で実際に

起こったことのあり様を描く段階である。この場合、言語主体の焦点は文の中に現われている事柄全体で、思考を通してその関係を認定するのではない。つまり、二つの事柄の関係は物理的時間の線の上、「接点」にある。この時間的接点は二つの事柄の関係であるが、この関係は言語主体から離れた客体界に生じたもので、言語主体の判断・意志のコントロールができないものである。

この段階に属する条件表現は次のような条件を満たさなければならない。

1．Cl_1 と Cl_2に現われている事柄が独立する事柄で、両方とも必ずある時点において、ある場所で観察（見る・聞く・感覚などの Sensory input による）できる動作、或は、状態を表現しなければならない。

2．1.から見ると、この段階に属する文の動詞は次のようなものである。

a．動詞

人間（有情物）の行った具体的行動

例：バスに乗る

学校へ行く

鍵を開ける　　など

b．状態

抽象的な状態ではなく、観察しうる実際の、ある状態、人間・有情物の存在と外界の描写である。

例：（人・有情物）が食べている

（人・有情物）が待っている

（物）がある

（感じ・におい）が感じられる

日があたっている

雨が降っている　　など

3．文末の叙述表現：た、ていた

なお、この段階の文を次にあげる三種類の時間的関係に分ける。

1．連続：同一動作主による動作

V_1：動作動詞　　V_2：動作動詞

⑧　太郎は部屋に入ると、窓をあけた。

2．発見（注５）：

V_1：動作動詞　　V_2：状態

⑨　外に出たら、雨が降っていた。

⑩　うちに帰ると、手紙がきていた。

3．時：V_1状態　　V_2：動作動詞／状態

⑪　夏になると、国へ帰った。

⑫　近所へ買物に出たら、酒屋や肉屋の主人がとんできて、私の手をひっぱった。

3．2．判断段階

言語主体が自分の論理・思考を通して、自分の経験と意志とは関係のない二つの事柄を結びつける。換言すれば、言語主体にとって、Cl_1 と Cl_2 の間に関係があって、二つの事柄の接点――関係は言語主体の思考にある。ここで、言語主体の認定は事柄そのものではなく、想定された事柄の論理的関係である。この段階では抽象された概念、特定の場所・特定の時点において観察できない事も現われうる。例えば、文壇で孤立無援におちいる、話合いを進める、焼死者が出る、考慮に入れるなどのようなものがある。この段階に属する文はさらに次のように分ける。

一般：A.　Descriptive Normic Statements ――
physical, biological laws, etc.
B.　Normative Normic Statements ――
social (moral) norms, customs, regulations, etc.

個別：I．Cl_1 は言語主体による想定である。
II．Cl_1 は文脈による事柄である。

次のような例がある。

⑬　黄色と藍色を混ぜると、緑になる。
⑭　妊婦がたばこを飲むと、たちまち胎児の心音が激しく変化する。
⑮　節分がすぎると、立春で旧暦の正月、文字通り春立ちかえり、春の季節に入る。
⑯　今後の希望などを申述べて話合いを進めたら、きっと道は開けて行くだろう。
⑰　この協定を本当に尊重するのなら、米国は全部南ベトナムから撤退するはずである。

文末の叙述表現：表2参照。

3．3．表出段階

この段階では、言語主体の意志の直接的な表現が見られる。判断段階と同じく、条件文の Cl_1 と Cl_2 の間の関係は言語主体の心理世界で結びつけられる。言語主体と相手が文の内容に現われること、及び文末に、言語主体の意志表現が見られる点、判断段階と区別すべきだろう。心理的世界には、より論理的な面とより感情的な面がある。この段階は後者に属するわけである。Cl_1 と Cl_2 の関係づけ――接点は言語主体の意志・感情にあると言えよう。

この段階では、言語主体の思考によって、想定された事柄だけではなく、言語主体自身の意志・行為や場面における相手の行為・気持・相手による情報などが全部

現われうるので、問題が複雑になってくる。次の三種類に分けることにする（図参照）。

Ⅰ．Cl_1 は言語主体の想定する事柄で、自分の意志・相手のこと（観察できる行為・気持、発話）と関係ない事柄である。

次のような例文がある。

⑱　古川から合格を知らせてきたら、すぐ秋雄の会社へ電話する。（決意）

⑲　彼のプレイを聞いたら、あなたはきっと間違った考えをもつわ。（意志の伴った判断）

Ⅱ．Cl_1 は談話の場面と直接関係ある事柄である。Cl_2 は Cl_1 に対する言語主体の直接の意志の現われである。この種の条件文は文脈に依存していると言えよう。このため、Cl_1 と Cl_2 の間に句切りが強く感じられる。

⑳　あなたがそういう風におっしゃるなら、申しましょう。

㉑　この本を読むなら、貸してあげる。

Ⅲ．Cl_1 も Cl_2 も言語主体の自ら生じる感情・意志である。言語主体の心の描写と言えよう。次のような例文はこの種の文に属する。

㉒　どう帰ればいいかしら（と思う）。

㉓　どう教えたらよくのみこんでくれるか（と思う）。

文末の叙述表現：表３参照。

３．４．伝達段階

この段階では、判断段階・表出段階と同じく、条件文の Cl_1 と Cl_2 の関係は、言語主体の心理世界で結びつけられる。表出段階との違いは、文に言語主体の意志が現われているだけでなく、相手に対する働きかけも見られる点である。簡単に言えば、この段階に属する文の特徴は Cl_1 と Cl_2 との間の接点が言語主体の意志・感情にあって、しかもこの意志は相手までおよぼされるのである。そして、この段階もやはり表出段階と同じく、三種類に分かれる。次のような例文がある。

Ⅰ．㉔　秋になったら、一緒に遠足に行きましょう。

㉕　また、返事が来なければ、電話をして来てください。

Ⅱ．㉖　捕りたかったら、勝手に行け！。

㉗　そんなことしていると、寝る時間がなくなるぞ。

㉘　早くしないと、おくれるぞ。

Ⅲ．㉙　どうすればあなたのような統率力を持てるのですかね。

以上の枠組を立てた後、四つの語と文末の叙述表現との呼応について、実証的な分析（注７）を行った。各段階における分析の結果は表１～表４の示した通りであ

る。そして、四つの段階における、四つの語の分布、中心的な使用と使用上の制約が表5にまとめてある。

表1　描叙段階における接続の種類

接続＼語			ト	タラ
連　　続	個別	言語主体	○	*
		第三者	○	*
発　　見	個別		○	○
時	個別		○	○
	一般（習慣）		○	*

表2 判 断 段 階

文末の叙述表現 ＼ 語			a と	b たら	c ば	d なら
1. 中立的判断	1.1	動詞の終止形	21		32	5
	1.2	ことになる・ことがある	11		14	2
	1.3	名詞・形容動詞＋だ	9	5	14	10
	1.4	形容詞				
	1.5	のだ（ことだ）				
	1.6	ない	3	2	9	1
	1.7	はずだ	1	1	1	2
	1.8	べきだ				3
	1.9	にちがいない		3	4	
2. 不確定的判断	2.1	そうだ			1	
	2.2	らしい				
	2.3	かもしれない	1		2	
	2.4	（の）だろう（か）	1	11	10	11
3. 評価的判断	3.1	いい・よい（のだ）よいわけだ		1	10	2
	3.2	いいじゃない		1		
	3.3	いけない		1		4
	3.4	なんにもならない		2		
	3.5	よかった（のに）		2		
	3.6	しかたない				1
4. 疑問的判断	4.1	のではないかのではないでしょうか		2		2
	4.2	ものか			1	
			47	29	98	43
		合　　計				217

表3　表　出　段　階

文末の叙述表現＼語		a			b			c			d		
		と			たら			ば			なら		
類	別	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
1	意志の伴った判断 （中立的・不確定的・評価的）	4	1		3	1		3	2		3	4	
2	決意 動詞の終止形 つもり う・よう てしまう （動詞）なくてはいけない				8			3			10		
3	希望：たい				1	2					3		
4	願望：ほしい												
5	感動： なあ・ねえ	1			3	1							
6	残念の気持 よかったのに				3								
7	疑い：か				2		3			2			
8	あやまり				1								
	数：種類別	5	1		21	4	3	6	2	2	16	4	
	数：語別			6			28			10			20
	数：表出段階												64

表4 伝 達 段 階

文末の叙述表現＼語			a			b			c			d		
			と			たら			ば			なら		
類	別		I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
1	意志の伴った判断（動詞の終止形＋終助詞など）			4			4					1	4	
2	すすめ	2.1 判断の態度による：いいじゃないなど											4	
		2.2 疑問詞による：どうだなど				5								
		2.3 省略による								1				
		2.4 質問による：いいじゃないか				1								
3	勧誘：う・よう					4							1	
4	許可													
5	依頼：てください てくれない てもらえませんか								1	2			4	
6	命令：＋てください ±なさい －てくれ・行け					4	3			5 2 1			2 4 7	
7	禁止					3				1				
8	間いかけ					4		3			1	3	1	
	数：種類別			4		21	7	3	1	12	1	4	27	
	数：語別				4			31			14			31
	数：伝達段階													80

表 5　四段階におけるト・タラ・バ・ナラの分布

段階	種類		と	タラ	バ	ナラ
描叙	一般（習慣）		○		○	×
	個別		◎	◎		×
判断	一般	A	◎			×
		B	○		◎	○
	個別	I	○	◎	◎	*○
		II	*○	*○	*○	◎
表出	個別	I	○	◎	○	
		II	*○	*○	*○	○
		III	○	○	○	×
伝達	個別	I	○	◎	○	
		II	*○	*○	*○	◎
		III	○	○	○	×

＊　その使用には制約がある。

ナラ I：Cl_1 は文脈と関係ある事柄でなければならない。

ト　II：文末の叙述表現は動詞の終止形である。

タラ II：Cl_1 に動詞の否定形・形容詞・可能動詞しか現われない。

バ　II：Cl_1 に動詞の否定形・形容詞・可能動詞しか現われない。

◎　中心的な使用。

×　使用できない。

空白　使用できないことはないが、使うと、文の意味が変ったり、ニュアンスが生じたりする。

4．条件表現とは

以上述べてきたことに基づき、私は、性質の違う、三種類の条件表現を分けることにする。

4．1．描　　写

〔時間的関係・個別／一般・事実・焦点：Cl_1→Cl_2全体〕

描叙段階に属する文である。文末の叙述表現には言語主体の判断・意志が見られない。この種の表現に現われる事柄が言語主体から見れば、自分と離れた客体界に起こった事柄の叙述である。二つの事柄の関係が物理的時間関係にあって、言語主体は観察者の立場にとどまり、その関係に関与できないのである。この種の条件表現は従来既定条件・確定条件といわれてきたが、言語主体の判断・意志の関与できる、ほかの条件表現と区別すべきだと思う。そして、「条件」というよりも、時間的関係を現わす描写・叙述と言った方が適切だと思う。この種類の表現には、分析の範囲に限っては、トとタラしか現われなかった。しかし、バは現われないことはない。(注８)

トとタラは時間的継起、個別、その場かぎりという特色を持っている、あるいは、トとタラの現われている文には動作主による意図的な関係がないなど、いろいろな研究（注９）によって、指摘された。この段階のトとタラのことを指しているのだろう。

私の分析ではトとタラによる時間的関係を現わす表現を三種類に分けた（表１参照）が、これによって、トとタラの使用上の制約や使い分けによる意味の違いに関しては、二つのことを指摘することができる。

1．トとタラの使用は、ほとんどの場合、置き換えられるが、「連続」の場合はタラが使用できない。これはトとタラの使用上の選択による、ニュアンスの違いの解釈にヒントを当たえると思う。次の例文を考えてみよう。

㉚　「……女中さんが火を入れに来て、みっともない、驚いて飛び起きたら、もう障子に日があたってるんですもの。」

㉛　その男は倉庫の扉の鍵を開けると、飛び込むようにして、その中に入り、それからわたしを大きな仕草で招き入れたのだった。

㉚の場合、タラを使うことによって、その「驚く」という気持、あるいは、「発見」の意外さが強く出てくる。一方、㉛の文の場合には、トを使うことによって、二つの事柄の間の瞬間性・同時性が強く示されている。つまり、タラを使うと言語主体の主観的な態度がより強く出てくる。「連続」の場合は、Cl_1とCl_2に現われている動詞が同じ動作主による動作であり、言語主体のより主

観的な態度が入る余地がないため、タラは使えない。

2．三つの関係の中、「時」の場合だけは一般的と個別的な事柄に分ける。そして、タラは一般的な事柄を現わす文にはあまり使われない。次の例文を見ると、わかるだろう。

㉜　夏になると、（いつも）国へ帰った。

㉜′　？夏になったら、（いつも）国へ帰った。

主観性、あるいは、陳述度の観点から見ると、この現象は1で述べたことと一致している。つまり、トの方はタラより客観的な性質を持っているということである。

4．2．仮定条件表現

〔論理的関係・一般／個別・非事実・焦点：Cl_1とCl_2との間の論理的関係〕

Cl_1 も、Cl_2 も言語主体によって想定された事柄であり、本の意味の条件表現といえよう。判断段階（個別IIを除く）・表出段階Iと伝達段階Iの文はこの種の表現に属している。言語主体が注目しているのは二つの事柄の関係である。四つの語も現われうるが、トとナラには自分自身の独特な用法があるため、制約される場合がある。バとタラの使用はわりと自由で、広く使われる。以下、四つの語の特色、使用上の制約、及び使い分けによるニュアンスの違いについて簡単に述べよう。

1．ト

トの中心的な使用は判断段階の一般(A)にある。そして、この使用はトの独特な使用ともいえよう。しかも、判断段階においては、文末の叙述形式は中立的判断の場合が多い。バとタラと比べると、dictum 的世界に近い。言語主体の意志が見られる表出段階と伝達段階では、トも現われうるが、その文末の叙述形式を見ると、やはり、判断にとどまっていて、モダリティの高い方にはいかないのである。それに、文末に強い意志の伴った判断・勧誘・命令・禁止などがくる場合、トは現われないことが特色である。次のような例があげられる。

㉝　しろうとに教育ができるなら、学校なんかいらないではないか。（＊ト）

㉞　あしたお天気がよかったら、ハイキングに行こう。（＊ト）

㉟　出かけたら、牛乳を買ってきてください。（＊ト）

2．タラ

タラは四つの語の中で、一番使用範囲の広い語である。その中心的な使用は表出段階のIにある。つまり、言語主体の心の意志の表現はタラと一番密接な関係にある。この特色は判断段階におけるタラの使用によって支持されている。判断段階では、タラを個別的な事柄に使うのが典型的である。しかも、その文末の叙述形式はより強い主観を現わしている。不確定的判断と評価的判断に属

するものが多い。次のような例がある。

㊱　それができたら、災害防備はずいぶん楽になることだろう。

㊲　今度の戦争で負けたら、負けっぱなしではないか。

3．バ

バの中心的な使用は判断段階にある。つまり、その性質はより論理的な面に近い。個別的な事柄にも、一般的な事柄にも使えることから見ると、同じ段階に現われるトの一般性と個別性を兼ねていて、「中立」的と言えよう。表出段階と伝達段階に現われる時、判断段階に現われるバの特色が関与してくるので、タラのような言語主体の強い意志が見られない。三上章はバを当然関係を現わす「基本条件法」と名付けたが、この当然関係は言語主体の思考にある当然関係で、自然に生起する事柄の間の当然関係とは違うことを指摘しておきたい。「ちりも積れば山となる」と「春がくると花が咲く」との違いは今述べたところにあるだろう。前者の場合、言語主体の焦点は二つの事柄の論理的関係にあり、後者の場合、二つの事柄の自然生起の関係にある。厳密に言えば、「春がくると、花が咲く」という文は描叙の方に近いが、繰り返して起こることであって、一種の常識である。このため、言語主体の論理的な態度によって、結ばれるというようにも取れる。以上述べたことから、バがトより modus 的な側面に近いと言えよう。

4．ナラ

ナラは基本的には文脈に依存していて、題目提示の性質を持っているため、仮定条件表現における使用にはかなり制約される。実際の用例は少なかったが、判断段階では、ト・タラ・バと置き換えられる。判断段階において、一般的な知識・概念と関係ある事柄が多い。前提条件表現と仮定条件表現（個別）との区別は、はっきりしない場合もあるためである。従って、Cl_1 は文脈と関係ある限り――多くの場合、指示代名詞によって示される、ナラが使える。次のような例があげられる。

㊳　この手法を継続して行なえば、政府与党の物価政策への姿勢も変わってくるかもしれない。（○なら）

㊴　この失業率の数字だけみると、日本は世界でも冠たる〝雇用先進国〟になる。（○なら）

㊵　そうした現実にほおかぶりして前進すれば、大きな問題が持ち上がるだろう。（○なら）

㊶　それができたら、災害防備はずいぶん楽になることだろう。（○なら）

しかし、Cl_1 と Cl_2 の間に、必然的な因果関係――物理的にせよ、生理的にせよ、がある場合は、ナラを使用できない。

㊷ ボタンを戻せば、開いたには再び閉じるので、いちいちごみを押し込まなくてもすむ。（＊ナラ）

㊸ スプレー式で、うしろのボタンを押すと、人形の口から真白いアワが出てくる。

㊹ 二万キロも走れば、車だってがたがたになる。（＊ナラ）

4．3．前提条件表現

〔論理的関係・個別・Cl_1：事実(状態)・焦点：→Cl_2〕

前提条件には、Cl_1 が文脈による情報でなければならない。Cl_2 は Cl_1 に対する言語主体の判断・意志の叙述である。従って、焦点が Cl_1 と Cl_2 の間の関係だけではなく、Cl_2 も焦点である。この種の条件表現も、判断段階・表出段階・伝達段階に表われる。本稿の分析範囲の限りでは、ナラによる表現と一番密切な関係がある。ほかの三つの語の使用には制約が見られる。

三上章はナラについて、「組立て条件法」と名づけた。そして、この条件表現は連体法に収まりにくく、バ・ト、タラと比べると、その句切りが一番大きいと指摘した。これは、ここで述べるナラが前題を指示する機能と一致する点である。ナラはほかの三つの語と違う性質を持っていることが次にあげる証拠を見ればわかると思う。

1．ナラの前には言語主体による疑いが現われない。「文脈による」と取れないからである。

㊺ どうすれば顔が赤くなるか。（○タラ、○と、＊ナラ）

㊻ どうしたらいいか。（○バ、○と、＊ナラ）

2．ナラの前に名詞、或は、名詞化されたもの（注10）がくるのが特色的である。実は、前提条件表現の Cl_1 は独立性が高く、一つのまとまった事柄を示さなければならない。

㊼ それなら、硫黄を取り入れたら、とてもすてきな美肌科が出来るんでしょう。

㊽ チンピラは、職務質問しようものなら、いつ反撃されるかわからないのが実情です。

㊾ この協定を本当に尊重するのなら、米国は全部南ベトナムから撤退するはずである。

3．表出段階と伝達段階では、Cl_1 ははっきりと談話の場面によるので、ナラ・バ・タラ・トなどの使用上の制約が強く働いている。Cl_1 の述語は動作動詞の肯

定形である場合、「の」を挿入しなければならない。

⑤⓪　デパートへ行くなら、連れて行ってください

（＊バ・＊タラ・＊ト）　（○ノデアレバ・○ノダッタラ・＊ノト）

⑤①　この本を読むなら、貸してあげる。

（＊バ・＊タラ・＊ト）　（○ノデアレバ・○ノダッタラ・＊ノト）

しかし、Cl_1 の述語は形容詞・動詞の否定形・可能動詞・存在動詞などのような、状態を現わす語であれば、「の」の挿入が要求されていない。

⑤②　捕りたかったら、勝手に行け！

⑤③　食べきれなかったら、残していいんですよ。

実例を見ると、タラはマイナス方向の命令表現（てくれ・動詞の命令形など）との結びつきが多い。一方、バはプラス方向の依頼・命令との結びつきが特色である。この現象も仮定条件表現で述べた特質と一貫すると思う。タラはより主観的であり、マイナス方向の命令と結びつく場合、その命令の感じを強く感じるが、バは「中立」的性質を持っているため、プラス方向の命令と結びつく場合、相手の気持を気兼ねるニュアンスが出てくると思う。

5．おわりに

以上の考察から、条件表現はなぜ複雑であるかという問いかけに対して、二つのことがわかった。まず、条件表現に現われる四つの語に関しては、同義関係と一語多義の問題が絡んでいる。従って、この問題を扱う時、文の意味から出発しないと、混同を起こしてしまう。次に、日本の伝統文法では、「条件表現」、あるいは、西洋文法のように「条件法」を別に項目を立てて論じなかったが、一般的にはト・タラ・バ・ナラが接続助詞として扱われてきた(注11)。しかし、以上の分析から見れば、これらの語と文末の叙述表現との間には、呼応があって、その結果、より詞的な詞と辞的な詞があるのではないかと思う。条件表現において、四つの語の文法上の使い分けと意味の微妙な違いは、四つの語の持つ、この性質上の区別から生じるのだろう。

本稿では、粗い概念で、「陳述態度」の枠組を立てて、条件表現を分析したが、陳述とは何か、文の中で陳述の力はどこに宿っているか、詞と辞の区別はどう決めればいいかなど一連の複雑な問題は、まだ、手つかずのまま残っている。なお、一般・個別、前提・焦点、事実・非事実などの基準を使ったが、これらの基準、及び本論で扱わなかった基準は枠組におけるヒエラルキーの排列はどうなっているかに対しても、多くの疑問点を持っている。その上、文末の叙述表現の分析だけでは不

十分で、文と関係あるほかの諸問題、動詞の分類、テンスとアスペクトの問題、人称の問題及び格関係など、も考慮に入れ、文末の叙述表現と呼応する体系的な文法記述をしなければならない。もし、厳密な枠組を立てることができれば、文の構造、ないし文の意味の微妙なところを説明するのに役立つと思う。条件表現だけではなく、日本語におけるほかの問題点、例えば、ハとガの違い、ノデとカラの違い、コトとノの違い、ナガラ・テ・時・タラ・トの使用上の制約の問題なども、解決できると思う。

《注釈》

注１　本稿で扱う文末の叙述表現は文の内容と直接関係ある文末の叙述表現で、終助詞などを除く。

注２　日本語の名前は同じであるが、英語の名前は違う。それに、林の内容と異なるところがある。

注３　四段階における文は全部実際のコミュニケーションに現われうるが、本論で言う「伝達」とは実際のコミュニケーションにおける伝達と違って、文の内容が直接相手に働きかけがあるという意味である。Discourse の一種と考えてよい。

注４　この問題に関する研究は、渡辺実による「叙述」と「陳述」の区別、芳賀綏による「述定」と「伝達」の区別、林四郎による「描叙段階」・「判断段階」・「表出段階」・「伝達段階」、南不二男のＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ段階などがある。

注５　豊田豊子による名称。「発見のと」『日本語教育』　36号　1979。

注６　Osten Dahl, "On Generics" による次のような解釈に基づいている。

Descriptive normic statements:　the laws expressed may not be broken.

Normative normic statements:　the norms expressed may be broken.

注７　用例は新聞、小説、随筆、シナリオ、脚本などから集めたものである。

注８　文学的な表現（例：あけて見れば、愛があった）、あるいは、習慣（例：その頃、田舎へ行けば、米のめしが食べられた。）を現わす時、バも使える。しかし、この類の文の数が少ない。本論では、タラとトを中心に論じることにする。

注９　久野暲　『日本文法研究』　第12－14章

鈴木忍　『文法Ｉ　助詞の諸問題Ｉ』

Inoue K.　"On Conditional Connective."

注10　Akatsuka Noriko の研究に、「の」、「もの」の現われる従属節は言語主体がその事柄を事実として presuppose するものであるとの指摘がある。筆者もこの説に同意する。従って、Cl_1 は前提である。

注11　例えば、佐久間鼎は四つの語を接続助詞として扱った。そして、接続助詞に関しては、「実は二つの構文の間に立って、その結びつけを役目とするものに外ならないものです」(p. 263) との指摘がある。

《参考文献》

佐久間鼎　『現代語法研究』　厚生閣　1950
田中章子　「助詞」　『日本語７・文法II』　岩波書店　1977
豊田豊子　「接続助詞　その用法と机能Ｉ」　『外語大日本語学校論集５』　1978
「発見のと」　『日本語教育』　36号　1979
「接続助詞・その用法と机能III」　『外語大日本語学校論集６』　1979
永野賢　「「もしも私が家を建てれば……」の文法――条件表現「ば」「と」「たら」「なら」――」　『新・日本語講座２　日本語の文法の見えてくる本』　汐文社　1969
林四郎　『基本文型の研究』　明治図書　1960
三上章　『続・現代語法序説』　くろしお　1972
南不二男　『現代日本語の構造』　大修館書店　1974
宮島達夫　「助詞・助動詞の用法」　『現代雑誌九十種の用語用字　第三分冊・分科』　国立国語研究所　1964

Akatsuka, Noriko. "Another Look at No, Koto and To: Epistemology and Complementizer Choice in Japanese". Problems in Japanese Syntax and Semantics. (ed. by Hinds, J. and Howard, I.) Tokyo: Kaitakusha. 1978 "Epistemology, Japanese Syntax and Linguistic Theory". Papers in Japanese Linguistics. Vol. 6. 1979.
Dahl, Osten. "On Generics". Formal Semantics of Natural Language. (ed. by Keenan, Edward L.) London: Cambridge U. Press. 1975.
Hinds, J. and Tawa, W. "Conditions on Conditionals in Japanese". Papers in Japanese Linguistics. Vol. 4. 1976.
Inoue, K. "On Conditional Connective". 文部省科学研究費補助金特定研究 (1) 1979.
Kiparsky, P. and Kiparsky, C. "Fact". Semantics. (ed. by Steinberg and Jakobovits) Cambridge U. Press. 1971.
McGloin, N. "The Speaker's Attitude and the Conditionals To, Tara and Ba". Papers in Japanese Linguistics. 1977.

Where Epistemology, Modality, Meaning and Grammar Meet: A Case Study on Conditional Expressions in Japanese

CHAU FUK-HING, REBECCA

The problem of the so-called "conditional expression" in Japanese is an extremely ambiguous one as it involves four constructions ……To, Tara, Ba and Nara…… which are in many respects similar. The purpose of this paper is to tackle this problem within the framework of modality proposed by the author.

With the presumption that one prominent characteristic of Japanese syntax is its extreme sensitivity to epistemological considerations based on the objective/subjective distinction and the ego/non-ego distinction, the following two main elements are considered in establishing the framework.

1. The predicative expressions at the end of the sentences which reflect the "mood" of the speaker.
2. The speaker's attitude towards
   a. the objective happenings,
   b. the speaker's own thoughts and inner feelings, and
   c. the discourse.

Four stages, namely, a depictive stage, an assertive stage, a volitional stage and a directive stage, are divided along the dictum-modus scale within this framework. Finally, we come to the conclusion that, actually, the so-called conditional expression consists of three different kinds of expressions. They are as follows:

1. Narration of objective happenings
2. Suppositive conditional expression
3. Presuppositional conditional expression

Through the analysis of examples collected from newspaper, essays, novels and scenarios, it is verified that the framework can be used, to a large extent, in explaining grammatical rules, acceptability and nuances of meaning caused by the optional choice of the relevant constructions within a certain context. However, since a systematic framework which takes into account all the syntactic and semantic properties of sentences besides the predicative expressions has not yet been developed, clarification and elaboration of the present framework is necessary.